

プロジェクト課題No. 1

次代を担う生産者の育成による 梨産地活性化

活動期間：令和5年度～令和7年度

対象者：JA仙台利府梨部会 部会員4人（同部会員61人）

チーム員：高橋真紀、高橋晋太郎、佐藤篤



1 課題の背景・ねらい

(1) 背景

- J A 仙台利府梨部会員は61人、面積は約20ha。園主の高齢化等の問題がある。
- 利府梨の需要は高く、足りない状態。園地承継・拡大が望まれている。
- 支援対象者の4名は、新技術・省力化技術等への関心が高く、重要な担い手として育成することにより産地の活性化に貢献できる。
- 利府町の積極的な支援により、国・町の補助事業や地域おこし協力隊の起用・支援がある。

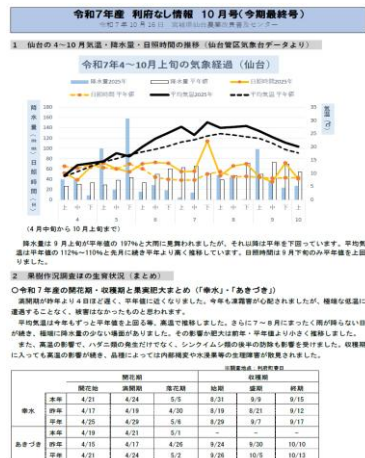
(2) ねらい

【定量的数値目標】 支援対象者の目的に沿った新技術等導入の増加数 現況

(R5) 2件 → R6：4件 → R7：6件

- 新技術や新品種が導入され、梨の収量・品質が向上する。
- 担い手の交流活動が定着し、自発的な取組が行われるようになり、産地が活性化する。

2 活動内容 (1) 安定生産・高品質化技術の理解促進



●技術情報資料の発行
R5~7(3~10月/月1回)

●土づくり研修会
(R5 2回 /R6 1回 /R7 1回)

●R5~7天敵ダニ製剤の活用(現地検討会+巡回指導)



●防鳥ワイヤーの設置、実証(R5)



●ジベレリン処理の実証



●有望な早生品種の導入



●環境にやさしい防除PRパンフレット作成(R7)
*グリーンな栽培体系加速化事業の取組

2 活動内容 (2) 担い手の交流活動への理解促進



R7 県なし栽培研修会への参加、午前中の各地区担当の梨の木を剪定



R6 県現地検討会への参加(部会員は20名ほど参加)



R6 県外視察(新潟県)



R7 県外視察(茨城県下妻市・栃木県佐野市)



2 活動内容

(3) 産地活性化に向けた補助事業の活用支援

I 目標年次
計画期間は、2024年度から2028年度までの5年間とし、最終年度を目標年次とする。

計画の中間年度となる2026年度（3年後）及び計画の最終年度となる2028年度（5年後）が終了した時点で、目標の達成状況を産地協議会で確認することとする。

また、最終年度となる2028年度には、次期計画（次の5年間）について産地協議会で精査した上で、検討を進めることとする。

| 2024年 | 2025年 | 2026年 | 2027年 | 2028年 | 2029年～2032年 |
|-------|-------|-------|-------|---------------------|-------------|
| | | 状況確認 | | 状況確認 次期計画の 策定 | 次期計画 |

II 果樹産地構造改革計画策定の目的

利府町は、宮城県のはげ中央に位置し、古くは多賀城の国府として、近世に入ってから仙台城下に接する北方の要衝として栄えた。町内には大型商業施設をはじめとして、3つのJRの駅と、高速に接続する4つのインターチェンジがあり、その利便性の高さから子育て世代に人気の町である。

利府梨の栽培は、明治17年から開始され、ピークの昭和40年代には栽培面積が約50haまで拡大し、利府町は、長い歴史を有する県内有数の梨の産地として知られている。

現在は少子高齢化により生産者は減少しており、令和5年4月現在で栽培面積は約20ha、生産者数は60名となっている。梨の生産者は、主に個人の顧客を相手に、直接販売や、自ら運営する直売所などを通じ、生産した梨を販売してきた。

梨の収穫時期には、利府町を横断し松島に向かう県道8号線沿いに多数の梨直売所が開店し、「梨直売」と描かれたのぼりがたなびく風景は、今でも利府町の秋の風物詩となっている。

しかし、梨の樹木が経済寿命を迎え、生産者も高齢となり、利府梨を継ぐ担い手の不足が深刻な課題となっている。また、近年の気候変動の影響を受け、多湿による日焼け果、干ばつによる肥大不良などが多発しており、適切な栽培管理技術の継承が課題となっている。

このため、生産者や関係機関が連携して魅力ある産地づくりに取り組むため令和5年10月に設立された「利府町梨産地協議会」を推進団体とし、産地継続のため、今後10年間の産地ビジョンである、利府町梨産地構造改革計画を策定し、利府梨の再生とさらなる発展を目指す。



R5 産地協議会の設立総会

R5 産地計画の原案づくり



R7 他産地の果樹経営支援対策事業の取組を視察

3 活動成果

(1) 安定生産・高品質化技術の理解促進



◎天敵ダニ製剤を活用したダニ類防除実績

1)Hさん圃場

導入前 ダニ剤 9回散布 ⇒ 導入後 2回

2)協力隊圃場

導入前 ダニ剤 7回散布 ⇒ 導入後 3回

いずれもダニ類の発生を抑え、防除暦どおりの散布となった。

プロ対象者2名から天敵ダニ製剤を使った防除
+普及と農園研の巡回指導・支援

⇒生産者の口コミで技術が広がっていく

すごく暑い夏の日、
ダニ防除のため、カッパを着
てマスクをしての農薬散布を
しなくてよくなりました。

(生産者コメント)

3 活動成果

(2) 担い手の交流活動の促進



他産地と活発な交流を続けることにより、Pear・カレッジ・利府の活動の見直しにつながった(存続アンケートの実施等)。
プロ課題対象者が若手・新規就農者を指導する自発的サイクルが生まれている。

(3) 産地活性化に向けた計画策定支援

産地の規模・拡大に貢献。新規就農者の参入のきっかけにもなった。計画中の生産者も存在する。

| 事業導入者 (R8以降は予定) | 新規就農/規模 拡大 | 面積 (a) | 栽培方式 |
|--------------------|--------------------|-----------|------|
| R6 Hさん | 親元就農 | 10 | 慣行 |
| R7 Mさん | 親元就農 | 10 | VJ* |
| R8 Oさん | 新規参入 | 10 | VJ |
| R8 Kさん | 規模拡大 | ? | 慣行 |
| R9 Iさん | 新規就農(地域 おこし協力隊) | 20 | VJ |
| R9 Kさん | 新規就農(地域 おこし協力隊) | 10 | VJ |

* VJ・・・V字ジョイント栽培

3 活動成果（成果指標）と次年度の取組（案）

【定量的目標】

支援対象者の目的に沿った新技術等導入の増加

目標値：【R5】 2件 → 【R6】 4件 → 【R7】 6件

実績： 2件 ⇒ 4件 ⇒ 6件

【プロ課題対象者コメント】

- 土づくり研修会に参加して、適正な施肥量や施肥時期について理解できた。
- ジベレリンペースト処理をすることによって、新枝の拡張が早期に図られてよかった。



次年度より新規就農者が最新技術であるV字ジョイント栽培に取り組めます。こちらを支援しながら、町内への波及をすすめてまいります。